

2022年9月10日

乗木養一

6年A漢字

専の字誌

P. 2	精選案	当初は、「難学習漢字」として対象外だった。
P. 3	漢字表	当用漢字・教育漢字に採用。
P. 4	配当学年	一貫して6年配当。
	基本漢字表	カナモジカイ 500 字案に採用。
P. 5	出現頻度	新聞で500位台。
P. 6	習得状況	「読み」とくらべて「書き」が、かなりむずかしい。中学生になっても5割に達しない。
P. 8	音訓	「もっぱら」は中学校段階に割り振られる。
P. 9	字体と字形	「専」と既習の「博」の構成要素「専」とに、まぎらわしさがある。
P. 12	字体の変転	甲骨文のときから「𠂇」＋「寸」から構成されており、それが楷書にまでうけつがれている。
P. 13	字源説	字源そのものが不明であり、なぜ《もっぱら》となったのか、説得力のある説がない。現行の学習漢字辞典の字源説は、どれも誤りである。
P. 17	字義 意味の変転	原義不明。またどれが基本義でどれが派生義は明確に位置づけることができない。
	語イ	教育基本語イに「専門」が選ばれている。「専門家」「専門店」などの複合語をもとに指導することがのぞましい。 *つぎの別ファイル参照「専 語イ表」 「専 語釈・文例集」

1. 国字研精選案における「専」の位置づけ

国字研精選案における「専」のあつかいのうつりかわり

		専
1978年8月	大久保忠利第1次私案 第2手順で難学習漢字に 「-：小学校精選案にふくめなかった漢字」	小学校600字 -
1978年12月	見城慶和・関可明修正案 対象にふくめていない	小学校758字 -
1984年4月	小学校第1次素案	小学校600字 -
1987年8月	小学校第2次素案	○漢字600字 -
旧精選案	1988年8月 国字研小学校第3次素案 「○漢字：小学校で書けるようにさせる漢字」に分類	○漢字614字 ○
2009年8月	2009年改定精選案 「A漢字：読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる」に分類	A漢字608字 A
2010年5月	2010年補正精選案	A漢字608字 A
現行精選案	2017年3月 2017年学習指導要領改訂に対応の精選案	A漢字608字 A

国字研の「教育漢字精選案」では、当初の1978年8月に大久保忠利が発表した「第1次私案」(600字精選案)で、「A特別漢字(100字)B「基本漢字」(500字)」の範囲に「専」を採用しませんでした。

大久保は、精選にあたり、つぎの3つの手順をふみました。

第1手順は、①「国立国語研究所7年間連続調査」で「読み・書き」とともに50%台以上可能だった字をえらぶことにしたといます。「専」は「書き」だけが50%台だったことから、この段階でまず除外しています。

第2手順は、①の調査で「読み・書き」とともに50%台以上にならなかった漢字394字を対象に、②「文化庁調査」と、③「清滝小学校調査」でもかさなって成績がわるかった字をとりだし「難学習漢字」としました。これが200字あったといます。「専」は、習得状況がわるいことからこの段階でも除外対象となりました。

1988年8月に国字研「第3次素案」で「専」は、小学校で書けるようにさせる「A漢字」に位置づけられました。大久保忠利私案から、10年の年月をついやし、現場の教員の実践をふまえた意見が反映されて、まとめられました。

それから20年後の2009年に国字研は、「第3次素案」を改定した「2009年改定(2010年補正)教育漢字精選案」を公表しました。現在では、これをもとに「1セット5過程」の実践をすすめています。

2009年改定は、紺屋富夫を中心に、ほぼ2年にわたり月例会で一字一字検討をし、国字研の複数の事務局員の試案をまじえながらまとめたものです。

精選の観点に「使用頻度、機能性(漢字語形成力)、必要性(学習や日常生活に必要であるか)が高いか」、学校教育において「適切な時間配分で指導できる漢字数か」(読みとり、作文、文法などの指導時間が確保できるか)をたてて、実際の漢字指導に生かすことができる「精選案」をめざしました。

大久保忠利私案が利用した各種調査

① 「国立国語研究所調査」(小学校7年間連続調査) 1952年 - 1959年

平均正答率 50% 以下の文字を具体的に列挙しよう。

50%台	6年用	* * 専	暴宗党誠潔証徳兼検
			討誤招

(国立国語研究所報告 26 『小学生の言語能力の発達』 明治図書, 1964年)

② 「文化庁調査」(6年間調査) 1964年 - 1969年

学年別正答率 (%)

調査漢字	調査問題	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1
専	専門 読み				48	52		58	58.9
6年配当	書き				63	85		93	

空欄は調査をしていないものとみられる。

(文化庁文化部編, 国語シリーズ 67 『児童・生徒の読み書きの力』 当用漢字について, 大蔵省印刷局, 1972年)

③ 栃木県日光市立清滝小学校調査 1953年 - 1956年

(文部省, 初等教育研究資料第19集 『漢字の学習指導に関する研究』 明治図書, 1957年)

2. 漢字表

(1) 当用漢字表 (1946年11月16日, 1850字) 右図→

(2) 当用漢字別表 (「教育漢字」1948年2月16日, 881字) 下図↓

寸部	寺専尊対(對)導
----	----------

(3) 当用漢字音訓表 (1948年2月16日) 下図↓

寸部	専	セン
----	---	----

(4) 当用漢字字体表 (1949年4月28日) 右図→



(5) 当用漢字改定音訓表 (1973年6月18日)

「セン」にくわえて「もっばら」が追加された。

(6) 常用漢字表 (1981年10月1日) ↓

専(専)	セン もっばら	専門, 専属, 専用 専ら
------	------------	------------------

2010年改定で変更なし。



3. 小学校学習指導要領の配当学年の推移

告示	実施・使用開始	学習指導要領・教科書		教育漢字数
	1947年4月	学習指導要領(試案)	[注1] なし	684
	1951年4月	小学校学習指導要領(試案)	[注2] あり	881
1958年	1961年4月	小学校学習指導要領	6年	881
1968年	1971年4月	小学校学習指導要領	6年	996
1977年	1980年4月	小学校学習指導要領	6年	996
1989年	1992年4月	小学校学習指導要領	6年	1006
1998年	2002年4月	小学校学習指導要領	6年	1006
2008年	2011年4月	小学校学習指導要領	6年	1006
2017年	2020年4月	小学校学習指導要領	6年	1026

[注1] 1947年『文部省著作国語教科書』第6期国定読本(いいこ読本)の提出学年と教育漢字数である。

[注2] 「881字」は、義務教育期間中の指導字数である。「専」もふくまれていた。

音訓の学校段階別わりふり(2017年3月31日 文部科学省)

セン(小学校), もっぱら(中学校)

4. 基本漢字表

1. カナモジカイ500字案 1936年

〔セ〕世生正西成青制性
節説千川先船専線戦鏡

(オカザキ ツネタロウ・岡崎常太郎『漢字制限の基本的研究』, 松邑三松堂, 1938年)

2. 夜間中学生のための生活基本漢字381字(見城慶和作成) 1975年

該当なし

([国字研・漢字指導法研究会](#) ウェブページ)

3. 日本語基本漢字『未来』500字案 竹端瞭一(たけばりょういち) 1990年

〔セ〕世正生成西声制性青政星聖製石赤席切雪説千川先専船戦線選

(『川村学園女子大学研究紀要』第2巻, 1991年3月)

4. 「日本語教育の参照枠」における「基礎漢字」122字(文化審議会国語分科会) 2021年

該当なし

(『日本語教育の参照枠』報告 文化審議会国語分科会 2021年10月12日, P.68)

5. 出現頻度

(1) 「現代新聞の漢字」国立国語研究所 1976年

1966年1月1日付け～1966年12月31日付けの「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」3紙の朝夕刊全紙面につかわれた漢字を異なり字種ごとにまとめ、順位づけている。

それによると「専」は、つぎのような順位となっている。

全体順位 524位, 全体使用率 0.464%

層内順位 政治513位, 社会583位, 経済382位,
文化家庭459位, 運動芸能653位, 広告378位

用語例 524 専* 460

セン 【451.23】

語 専横 専科 専業 専行 専攻16 専修 専従
専焼(産産～火力) 専心 専制 専属 専任 専念16
専売15 専務51 専門230 専有 専用39
語 専管12(商業～水産) 専大18(専修大学) 医専 旧専
(旧制専門学校) 高専(高等専門学校)

因地 【9/5】

因 専 専四郎 専成 専太郎 専定

(2) 「漢字出現頻度表(3)」文化審議会国語分科会 2007年3月

教科書での出現例は720位。新聞での出現例は500位台。

漢字出現頻度表 順位対照表(Ver.1.3)

凸版(3)順位	漢字	種類	表外漢字字体表	新聞調査(朝日)	新聞調査(読売)	ウェブデータA	凸版(3)第2部
761	羽	常用		1028	936	955	880
762	及	常用		750	686	589	433
763	専	常用		550	566	564	720
764	逆	常用		771	825	728	861
765	腕	常用		1054	1063	959	1888

2010年常用漢字表改定のときに、文化審議会が改定作業に使った資料。審議では、一般の書物である「凸版(3)」調査を基本資料とし、他の調査を補助資料と位置づけた。

凸版(3)順位 2004年から2006年までに凸版印刷が製作した864冊分の組版データ
新聞調査(朝日) 2006年10月1日から11月30日の期間の朝日新聞の紙面データ
新聞調査(読売) 2006年10月1日から11月30日の期間の読売新聞の紙面データ
ウェブデータA 2007年2月、4月、6月のウェブサイトのデータ
凸版(3)第2部 凸版(3)調査のうち教科書だけのデータ
(2008年5月12日 文化審議会国語分科会漢字小委員会資料)

国字研の「2009年改定教育漢字精選案」のとりまとめには、この「漢字出現頻度数調査(3)」を利用しました。

6. 習得状況やリテラシー調査の結果

読みとくらべて書きが、かなりむずかしい。中学生になっても5割に達しない。

1. 国立国語研究所「漢字の習得度調査」1982年 - 1984年

国立国語研究所が1982年から1984年にかけておこなった「漢字の習得度調査」の結果です。1981年に当用漢字表が廃止され、常用漢字表が制定された直後の調査です。なお1985年には「付表の語」についてのみ調査しています。

調査は、常用漢字1945字の一字一字を対象としました。うち小学校学習漢字996字は、1977年告示、1980年実施の「小学校学習指導要領」の学年配当をもとにしています。

3年間で東京都内の小学校のべ85校、中学校52校、高校20校、秋田県の小学校8校、中学校3校、奈良県の小学校13校、中学校3校が協力しておこないました。(1985年「付表の語」調査：東京都の小学校3校、中学校2校、高校2校)

主調査地域だった東京都の集計をもとに習得状況を以下にしめました。

「国立国語研究所調査」(東京都の集計) 1982年 - 1984年

		調査問題	1年下	到達度	1年上	2年上	4年上
読み	セン	専門	66.5	89.5	96.0	97.5	99.5
書き	セン	プラモデルを専門にうる店	16.0	45.0	46.0	55.0	69.0

調査実施時期：1年下(小学5年11月)、到達度(中学1年4月)、
1年上(中学1年11月)、2年上(中学2年11月)、4年上(高校1年11月)

読みの習得率が高いが、書きは中学生になっても50%以下が出ている。
(国立国語研究所報告95『児童・生徒の常用漢字の習得』東京書籍、1988年3月25日)

この「漢字の習得度調査」は、国立国語研究所の言語教育研究部第一研究室がおこないました。言語教育研究部第一研究室長の久保愛(1982年度末退任後名誉所員)も参画しました。

そしてこの調査結果『児童・生徒の常用漢字の習得』は、「国字研小学校第3次素案」(1988年8月発表)の作成にいかされました。

2. 特定の課題に関する調査 2006年 国立教育政策研究所

書き

出題漢字	音訓別	配当学年等	熟語	通過率(%)	問題文
(第1学年)					
専	音読み	小学校第6学年	○	41.0	センモン的な話をする。

(特定の課題に関する調査 国語, 算数・数学, 国立教育政策研究所, 2006年7月)

(分析) 字形を正確に把握していないために誤っている

イ 書き

漢字の書きの誤答としては、「拡張」「功績」「奮って」など語句そのものの意味がわかっていないために、無解答や誤答となっていると考えられるものが多い。

誤答例としては、以下のようなものがある。

- a) 意味を考えず、同じ音や訓をもつ漢字を当てはめているもの
「承認」を「証人」, 「健全」を「剣前」
- b) 片方の漢字に誤った同音の漢字を当てはめているもの
「混乱」を「困乱」, 「忠告」を「注告」
- c) 字形を正確に把握していないために誤っているもの
 - c 1) 字形が似ている場合 「奮って」を「奪って」, 「朗らか」を「郎らか」
 - c 2) 画数が多い場合 「勤」を「勤」, 「厳」を「嚴」
 - c 3) 点画の細部を間違いやすい場合 「覧」を「贖」, 「専」を「專」
- d) b, cが重なるもの 「専門」を「專問」, 「功績」を「功積」や「攻績」
- e) 文脈から語句の意味を考え誤った漢字を当てているもの 「健全」を「健善」「賢全」

(対策)

② 間違いやすい漢字の学習

誤答を分析すると、複雑な字形の漢字を書き間違ったり、同音の異なる漢字を書いてしまったりする傾向が見られた。このことから、複雑な字形の漢字や書き間違いやすい漢字は、特に取り立てて指導をし、確実に覚えさせる必要がある。

例2: 「専門」の「門」(門○, 問×)

「専門」の「門」は「分野」という意味があるが、「専門」の「門」を使う「部門」「破門」「門下」などの語句と、「問」を使う「学問」「質問」「問題」などの語句の違いを対照させて、当該漢字の字義を理解させる。

7. 読みかた・音と訓

音は小学校段階に、訓は中学校段階に割り振られる。

1. 音訓

専	セン	ⓐ ㊦	(字音語素) 専科, 専門, 専門家, 専用
	もっぱら	㊦	(副詞) 専ら

ⓐ 「当用漢字音訓表」(1948年)に収録された音訓。

㊦ 「常用漢字表」掲載の音訓。

赤字 「国字研プリント」の文に掲出のコトバ。

2. 日本漢字音

[中国語音] 《意味》

日本漢字音と語例

専 [zhuān]	呉音・漢音 [セン] 専門・専用・専心
《専一である・単一である》	

3. 同音・同訓の漢字

セン	千①, 先①, 川①中, 船②, 線②, 浅④中, 戦④, 選④, 銭⑥, 宣⑥, 泉⑥, 洗⑥, 染⑥中, 仙㊦, 占㊦, 扇㊦, 栓㊦, 旋㊦, 煎㊦ 2010追加, 羨㊦高 2010追加, 腺㊦ 2010追加, 詮㊦ 2010追加, 踐㊦, 箋㊦ 2010追加, 潜㊦, 遷㊦, 薦㊦, 緘㊦, 鮮㊦, 銑 2010削除
もっぱら	

○数字：配当学年, ㊦：小学校学習漢字外の常用漢字,
中：中学校段階にわりふり, 高：高等学校段階にわりふり,

4. 小学校国語教科書における音訓の提出学年(2020年版)

	光村 教出 東書 学図
セン	6年 6年 6年 6年

6年教科書本文の語

[光村図書] 燃えるごみ専用のごみ箱

赤字が本文提出の音訓 [教育出版] 専門家の意見

[東京書籍] 海獣を専門にみる獣医師

[学校図書] 専門+家

5. 和語の語幹・活用語尾と【送りがなのつけかた】

もっぱら

【専ら】

〈副詞〉

通則5 本則

送り仮名の付け方 本文 単独の語 2活用のない語 通則5

本則 副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る。

〔例〕 必ず 更に 少し 既に 再び 全く 最も

来る 去る 及び 且つ 但し

(「送り仮名の付け方」1973年内閣告示)

8. 書きかた・字体と字形

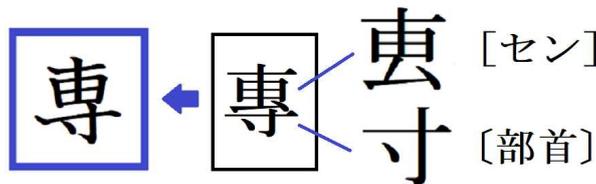
「専」と既習の「博」の構成要素「専」とに、まぎらわしさがある。

1. 字体

現行字体 	旧字体 	「本字」とされる字体 
常用漢字表体 学年別漢字 配当表	常用漢字表 のかつこ書き 康熙字典体	虞世南 [ぐ せいなん] の楷書から (7世紀)

小学校学習指導要領は、「漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること」としている。「旧字体」はこれにあたらない。

2. 部首・偏旁冠脚



部首	
説文解字	寸部 [スン部]
康熙字典	寸部 [スン部]
当用漢字表	寸部 [スン部]
長沢規矩也	一部 [イチ部]

長沢規矩也は「専」が「一」から書きはじめることに着目し「一部」としている。2019年5月例会資料「戦後の文字改革とむすびついた〈部首〉のみなおし」を参照。

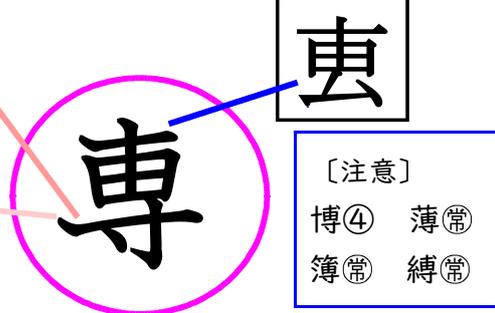
「寸」を部首とするおもな漢字
 寸⑥ 寺② 対③ 導⑤ 射⑥
 将⑥ 尊⑥ 尉④ 尋④ 耐④

「𠂇」を構成要素にするおもな漢字
 恵④ 穂④ / 傳 (伝の旧字)
 轉 (転の旧字) 團 (団の旧字)

(角川『新字源』改訂新版による)

3. 字形の構成要素

村① (木部) 時② (日部)
 守③ (宀部) 等③ (竹部)
 詩③ (言部) 持③ (手部)
 待③ (彳部) 付④ (人部) 府④ (广部)
 博④ (十部) 得④ (彳部) 特④ (牛部)
 団⑤ (口部) 謝⑤ (言部) 樹⑥ (木部)
 討⑥ (言部) [以下略]



「専」と「専」は
 字源が異なる。(P.11)

4. 楷書の画数と標準的な筆順，さまざまな字形

専

9画

専 専 専 専 専

行書例



小学校硬筆例



印刷文字の字形の例				
明朝体	ゴシック体	ユニバーサル デザインフォント	UDデジタル 教科書体NR	学年別漢字 配当表
専	専	専	専	専
手書き文字の字形の例				
専 専				

『常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）』
文化審議会国語分科会（2016年2月29日）を一部改編

5. 字体の正誤についての評価における許容例

長短のちがいは、
字体の判別のうえで問題にならない

一画めの横画の長さ



つけて書くことも、
はなして書くこともある

「十」 + 「日」で
書きすすめる字例

車②

字形が似かよっているが
たて画の筆順が異なる字例

由③ 画②

6. 類似字形

専

博④

7. 誤字例

専

点を打ちがち。

𠂔

「十」を先に書きがちになる。
「十・田・寸」と書く傾向がある。

「十」から書きはじめる字例

古 古 古 朝 首 真・直 𠂔 徳

8. 口唱法

(1) 下村式 (『小学漢字学習辞典』偕成社)

よこーに 日をかいて たてぼうかいたら 寸つける

(2) 自由自在式 (『小学漢字新辞典』受験研究社)

一日中 [じゅう] | 人 [ひとり] で寸評 [すんぴょう]
 専門家きどり

9. 「専」[フ]と「専」[セン]のちがい

「博」の「丶」は、父の2画めのなごり

ハ行音は、「丶」が必要

父 [フ]
《おとこ》

用

甫 [フ] [ホ]
《はじめて》

寸

専 [フ]
《ひろげる》

[ホ] [ホ] [ホ] [ホ] [ホ] [ホ]

補⑥ 捕 浦 哺 捕 舗

博 [ハク]

[ハク] [ホ] [ハク] [フ]

薄 簿 縛 敷

甲骨文の「父」は、
 「又」(手)に
 ものを持つかたちを
 あらわしています。



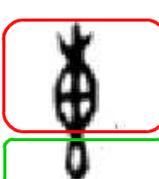
ハ行音でなければ、「丶」は不要

専⑥ 恵⑥ 穂⑥
 [セン] [ケイ] [スイ]

「専」の専は、ふくろだった (諸説あるなかの一説)

ふくろに「丶」はいらない

甲骨文の「専」



ふくろ

専

寸

専

[セン]

「ム」が消えていまの字体に



甲骨文の「専」

9. 字体の変転

甲骨文のときから「𠂔」 + 「寸」から構成されており、それが楷書にまでうけつがれている。

1. 字体の変転



各字体について

- ① 甲骨文第一期「賓組」のなかの一字。甲骨文では人名、地名、祭祀名で使用されており、意味は不明。(郭沫若『甲骨文合集』16079, 中華書局, 1982年)
- ② 春秋時代早期の「専車季鼎」とよばれる青銅器製の鼎 [かなえ] に鑄 [い] こまれているなかの1字。「専車」は《車いっぱいになる・大きな物の形容》でつかわれる語ですが、この「専車季」は、おそらく氏族名 (あるいは氏名) とみられます。「専」の意味は不明。
- ③ 『説文解字注』からとった小篆。『説文解字』は「専」の意味についてつぎのように述べます。

六寸簿也。从寸𠂔聲。一曰専，紡専。

《六寸の書きつけ板。寸 (法度) から構成され、「𠂔」が音。一説に「専」は「糸巻き」という。》

- ④ 紀元前2世紀、前漢におする高位の政治家の墓「馬王堆漢墓」 [ばおうたいかんぼ] 3号墓で発掘された絹布に書かれたつぎの文のなかにあります。

戴營魄抱一，能毋離乎？ 専氣至柔，能嬰兒乎？ (『老子乙道經』)

「營魄 [えいはく] を載 [やす] んじー [はじめ] を抱 [だ] きて、能 [よ] く離るること無からんか。氣を専 [もっぱら] にし柔 [じゅう] を致し、能く嬰兒 [えいじ] ならんか」

《心身のはたらきをのせて、「道」をいだし、そこから離れずにいられるだろうか。精神を集中させ (専氣) 心身を柔軟にして、赤子のようにになれるだろうか》

春秋時代の思想家老子が書いたと伝えられる書『老子』(老子道徳經)のなかの『道經』「能為」にある文を絹布に書いています。そのなかに「専氣」《気をもっぱらにして散らさぬ》というコトバがつかわれています。

⑤～⑦はどれも楷書ですが、字体にちがいがみられます。

⑤は、唐代初期の書家：虞世南 [ぐせいなん] (558年-638年) によるものです。字体は、「衷」+「寸」から構成され、後に「本字」とされた字体です。

⑥と⑦は、どちらも唐代中期の書家：顔真卿 [がんしんけい] (709年-784年) によるものです。

⑥は⑤の「本字」の「ム」の部分を簡略化しており、これが康熙字典体にうけつがれました。「常用漢字表」の()内でしめしている字体です。台湾、香港、韓国では、この字体がつかわれています。

⑦は、さらに簡略化しており、現行字体に通じます。「常用漢字表」の字体もこれをもとにしています。

各国の常用字体の比較

日本	中国	台湾	香港	韓国
				
5C02	4E13	5C08	5C08	5C08

日本「常用漢字表」
 中国「通用規範漢字表」
 台湾「常用国字」
 香港「常用字字形表」
 韓国「漢文教育用基礎漢字」

※それぞれの数字・記号はUnicode。

安岡孝一・安岡素子『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』(京都大学人文科学研究所, 2017年)をもとに構成した。

10. 字源諸説

字源そのものが不明であり、なぜ《もっぱら》となったのか、説得力のある説がない。

字源については、不詳です。各説を一覧します。

- (1) 『説文解字』A説(形声文字)六寸の書きつけ板。
- (2) 『説文解字』B説(象形文字)糸巻き。
- (3) 加藤常賢説 『説文解字』A説は誤りで、B説が正しいとする。

清代の考証学者：徐灝 [じょけい] 『説文解字注箋』をもとに、「衷」が「専」のもともとの字であり、《糸を巻く道具》とみる。上部の三つにわかれている部分が糸を明示しているという。



「専」は、「寸」(手)をくわえて、《糸を巻く道具を手に持つ》という意

味になるとする。

加藤常賢は、さらに『詩経』(小雅・斯干[しかん])の詩を引き、糸を巻く道具「𦉳」が、「《寝ている赤子の玩具物》となっている」とする。

乃生女子，載寢之地。載衣之裼，載弄之瓦。(『詩経』小雅・斯干)

[意訳] 女の子が生まれたら、地面に寝かせ、小さなおくるみを体に着せ、
糸巻き(陶器製の糸を紡ぐ道具)を手に遊ばせよう。

これを根拠に、「専」について、加藤は、「こどもが玩具物を手に持てば、容易に離さなくておのれの物とする。この意味から「擅」[セン]《ほしいままにする。ひとりじめにする》の意が生ずることとなった。」と解釈している。

(4) 藤堂明保説(象形文字) B説をもとにする。

「おもりの紡錘(糸を巻きつける心棒)は、何本もの原糸をひとつにまとめ、かつ一か所にとどまり動揺しないので、そこから専一の意を生じた。」とみる。

(5) 白川静説(会意文字)「𦉳」と「寸」とを組み合わせたかたち。

白川は「𦉳」は上部をくくったふくろのかたちで、ふくろの中に物を入れ、手(寸)でうって固めることを「専」といい、《まるめる・うつ》の意味となる」とみる。そして「ふくろの中の物をひたすらうち固めることから、《もっぱら・もっぱらにする》の意味となったのであろう」と解釈する。

(6) 阿辻哲次説(象形文字) B説をもとにする。

「糸巻きを手に持ち、糸を巻きつけるかたちにかたどる。かたく巻きつけることから、転じて、《もっぱら》の意にもちいる。」とみる。

[検討]

甲骨文の「𦉳」



(「組」は、うらないの担当者のグループ名)

甲骨文の「𦉳」には、「ム」にあたる下部があるものと、𦉳だけのものと、ふたとおりがあります。最新の研究によると、上部は《ふくろの象形》とみてまちがいないようです。また、下部はふくろを置く《台》とみられます。ただしこの《ふくろ》になにを入れるのか、なんのためにあるのかは、明確にわかりません。

甲骨文の「専」



「専」は、《ふくろを台にのせた「衷」を、「手」(寸)でもつようす》をあらわす会意文字とみられています。

ただし、この字がやがて《もっぱら》の意味でつかわれるようになったいきさつは、この段階ではわかりません。引伸なのか、仮借なのか、あるいはそれ以外のことがあったのかは、不明です。

史料・文献の用例をもとに意味をさぐるしかありません。

なお、甲骨文を《ふくろ》とみる点で、白川静の説があたっているようにみえますが、白川は下部もふくめて《ふくろ》としています。これは、最新の研究結果とことなります。また、「ふくろの中に物を入れ、手(寸)でうって固めることを「専」という」以降は、うらづけをまったくもたない、推測にすぎません。

一方、『説文解字』B説(象形文字)「糸巻き」をもとにした加藤常賢、藤堂明保、阿辻哲次らの説は、現段階では否定されたこととなります。

小学生向け学習漢字辞典の字源解説

小学館 例解学習漢字辞典	もとの字体は専。衷は、糸巻き用のおもり。それに寸(手)をつけたのが専。細いせんいを何本か合わせ、おもしろの石を回して一本のより糸を作る。一つにまとめることから「一つのことだけ」「ひたすら」という意味を表す。
学研プラス 新レインボー 小学漢字辞典	もとの字体は専。衷はくるくる回りながら糸をより合わせる道具。何本かの糸を一本にするので、一本にまとめるというイメージをとる。それに寸(手)を合わせて、一つのことだけに集中することをあらわした。
光村教育図書 小学新漢字辞典	旧字体は専。「寸(手)と衷[セン](系まき)」とを組み合わせた字。赤んぼうが、系まきをおもちゃがわりにして、はなしたがらないということから、何かを「ひとりじめにする」の意味を表す。
三省堂 例解小学漢字辞典	形声文字。もとの字は専。「衷」が系まきの形で、「セン」という読み方をしめしている。「寸」がついて、系まきを手(寸)でまわすことを表す字。
ベネッセ チャレンジ 小学漢字辞典	会意文字。もとの字は専。「寸」(手)と「衷」(系まき)を合わせた字。赤ん坊が系まきをおもちゃにしてはなさないことから、「ひとりじめにする」という意味を表す。
旺文社 小学漢字新辞典	会意文字。旧字体は専。「衷」(系巻きの形)「寸」(手)を合わせた字。手で糸巻きを持つ意味。赤んぼうが糸巻きで遊んでなかなかはなさないことから、ひとりじめにする意味に用いられた。
三省堂 小学漢和辞典 (長沢規矩也)	*他の多くの字については「なりたち」を解説するが、この字についてはふれていない。抑制的などころを評価したい。

小学生向けの漢字辞典のうち、小学館と学研は、藤堂明保説をもとにしています。「象形文字」とみているようです。50年以上もまえのとらえかたです。

光村教育図書とベネッセ、それに旺文社は、加藤常賢説をそのままのせています。「会意文字」とみているようです。これも、あたっていません。21世紀のいま、このような説をそのままたれながすのは、問題です。

そもそも「糸巻き」説は、甲骨文の存在を知らない2000年まえの『説文解字』による小篆の字体をもとにした想像の産物であり、空論です。

さらにこの「糸巻き」をもとに→「赤んぼうのおもちゃがわり」→「赤んぼうだから、離れたがらない」→「ほしのままにする・ひとりじめにする」と、まるで連想ゲームのような説を展開します。

たしかに「糸巻き＝女の子の玩具」は、中国で古代から固定観念として定着してきました。

さきに引用した『詩経』(小雅・斯干 [しかん])の「瓦(糸巻きの玩具)を手に遊ばせる」という「載弄之瓦」[さいろうのが]は、のちに「弄瓦之喜」[ろうがのよろこび/ろうがのき]という故事成語になりました。

【弄瓦之喜】女の子が誕生すること。また、そのことへの喜び。「弄瓦」は糸巻きを玩具にすること。中国では家事が上手くなるようにと、女の子に玩具として糸巻きを与えたことから。
(『四字熟語辞典』)

だからといって「奭」を「糸巻き」にしてしまい、それを「女の子のおもちゃ」に、そのまま結びつけるのには、飛躍があります。そのうえ「赤んぼうが、糸巻きをおもちゃがわりにして、離れたがらない」とまでいうと、飛躍に飛躍をかさねます。

しかも『詩経』小雅「斯干」のこの部分は、いまの時代にそぐわないものです。

「載弄之瓦」がうたわれる前段には、「男の子が生まれたら」があります。

それと対比すると、「寝かすさき」は、女の子が〈地面〉であるのに、男の子は〈寝台〉です。「あたえるもの」は、女の子が〈糸巻き〉であるのに、男の子は〈宝玉〉です。女の子には、「酒と食とを用意するのが役目」だとして家事にたずさわらすのに対して、男の子には「末は立派な人になるように」としています。歴史研究ならともかく、字源を語るには、完全にアウトです。

三省堂例解は、形声文字説をとっています。「奭」を「糸巻き」にとらえる点で、正確とはいえません。やはり50年以上まえの説をそのままのせています。

三省堂小学漢和のように、字源が不明なら、のせないというみちをとるべきです。

11. 字義・意味の変転

青字：漢語。日：日本語用法。□：別ファイル「語釈・語例集」に掲載の語。

現代日本語における意味分類（例）国字研プリントの意味分類をもとにABと2分した

- A それだけをひとすじにおこなう
 〈専一である・単一である〉〔ひとつに集中する・いちずに・もっぱら〕
 〈特別の・専用の・専門的な〉（あることだけを行う・ほかのことをしてはいけない）
- B ひとりじめにする
 （自分だけのものにする）〈独占する・もっぱらにする〉（自分だけの判断で勝手に行う）

「専」の変転状況

上記、AとBは、意味の変転過程をたどると明確に区別できない。BがAを引伸したり、逆にAがBを引伸したりしている。どれが基本義でどれが派生義かは明確に位置づけることができないので、ここでは品詞別にならべることにした。

原義



《ふくろを台にのせた「夷」を、「手」（寸）でもつようす》をあらわす会意文字。どんな意味かは、不明。

基本義

副詞 もっぱら～スル

- ① 単独で・ひとりで・独断で [≒独]
 使於四方，不能專對《四方の国に派遣されても単独で（独断で）応対できない》『論語』（子路）
- ② 勝手に・気ままに 専決・専断
- ③ ただ・まったく・ひとつに集中する・それだけを〔ある範囲に限定する意〕
 専従・専属・専任・専売・専務・専用
- ④ 全面的に・まったく〔例外なくすべてであるとの判断を表す〕
 其言專商鞅，韓非之語也《その発言はまったく商鞅〔しょうおう〕や、韓非子〔かんぴし〕のコトバそのものである》『漢書』（東方朔傳）

形容詞 もっぱら～である

- ① ひたすらなさま・いちずなさま 専意・専一・専科 日

動詞 ～をもっぱらにする

- ① 専有する・ひとりじめにする [≒「擅」[セン]]
 夫榮公好專利而不知大難〔夫れ榮夷公、利を専らにする（利益を独占する）を好みて大難を知らず〕『國語』（周語上）
 専有・専用
- ② 独断専行する・わがままにふるまう・ほしいままにする
 祭仲專，鄭伯患之《祭仲が独断専行するので、鄭伯〔ていはく〕はそのことを心配した》『春秋左氏傳』（桓公十五年）
 専横・専行・専制・専断・専擅〔せんせん〕《勝手に決断し行動する》
- ③ 特定の対象だけを修める
 不肯專儒《どうしても儒学だけを専攻しようとしな》『顔氏家訓』（卷第三・勉学）
 専門・専攻・専修
- ④ ひたすらになる・ひとつのものに集中させる 専業・専心・専念